

巻頭言

未来ビークルリサーチセンター長

角田 範義

未来ビークル事業は平成21年度に第1フェーズを終了し、平成22年度から文部科学省特別経費による「サステナブルな社会における未来ビークルシティー事業：低炭素社会における安全・安心なビークルシティー」を課題とした第2フェーズに入りました。

持続的に発展可能な「低炭素社会」や「安全・安心社会」の構築は、今後の日本が目指す重要課題（グリーンイノベーション、ライフイノベーション）の中に位置づけられています。その中で二酸化炭素を大量に放出する道路輸送に代わる、船舶輸送が低炭素社会の重要な輸送手段として再認識されています。それは、来るべき電気自動車社会に於いても同じことが言えます。電気自動車の弱点である電池の能力と充電に関する問題（充電時間、場所）は、長距離移動の難しさを浮き彫りにしていますが、船舶を利用することでその問題点は克服され、その結果、電気自動車化の推進における電気インフラは限られた範囲での整備を行えばよいことになります。豊橋を中心とする三河港は、地理的にも日本の中心に位置しており、関東圏、関西圏、さらには日本海側への物流、移動拠点（海外輸送も含む）として恵まれています。また、周辺の豊川、蒲郡および南信州地域は観光地があり、輸送手段としての港湾の役割への期待が増しています。そのため、低炭素社会を意識した港湾や都市交通システムの整備は、本地域が電気自動車社会を見据えたモーダルシフト化による船舶の利用には最も適した環境であると思います。

さらに、第1フェーズの事業で培われた「自動車の視点から見た安全・安心」の技術を「各世代からの視点から見た安全・安心」に発展させることにより新しい視点での自動車社会が提案できると考えています。これまでの自動車社会における安全・安心は、主に自動車というハード面を中心に行われており、歩行者である人の視点からの交通のあり方については欠落していた感が否めません。直面する少子高齢化社会においてはこれらの弱者の視点から見たビークルシティーを構築することが必要であり、本事業は、今までの視点を変えた新規な試みという点で、その成果は行政および自動車産業に対して強く影響を与えるものであると確信しています。

未来ビークルシティー事業では、以下の2つの課題に取り組みます。

1. 地の利を生かした陸上輸送から港湾：電気自動車社会に向けたモーダルシフト化における港湾の低炭素化と災害時における拠点としての港

- ✓船舶への陸上電力供給施設の導入のための電力源としての再生可能エネルギーを活用する。
- ✓先を見据えた港湾機能の能力向上のための環境アセスを含め調査する。
- ✓トラック専用道などによる幹線との接続を目指した新構想道路網を策定する。
- ✓海上、陸上交通の効率的運用と水域環境、陸域環境保全技術を確立する。

2. 「弱者」の目線による交通環境のあり方

- ✓今までの車から見た弱者観察を人間工学的に弱者から見た車観察を行い、交通システム（交差点、通学路、交通標識など）の洗い出しと解決策を示す。
- ✓電気社会のため電力源としての再生可能エネルギーを利用した、給電インフラを構築する。
- ✓モーダルシフト化を目指し、現交通システムの問題点の洗い出しと解決策を示す。
- ✓今まであまり検討されていなかった「低炭素」、「安全・安心」という観点での二輪やタイヤの役割を調べ、新しい視点での低炭素社会に向けた取り組みを行う。

以上の事業を遂行するためには豊橋市を中心とする近隣自治体や愛知県との連携が欠かせません。

最後に、第1フェーズの事業（平成17～21年度特別教育研究経費【連携融合事業】）によって築きあげた三河港を持つ周辺地域との連携による成果は、本事業が対象とする現代社会の抱える高齢化社会、地球温暖化といった問題の解決にあたり、より有益で社会的意義が大きいと考えられます。本成果は港湾機能の活用を通じた低環境負荷輸送拠点、周辺地域の高齢化社会における新しい自動車社会のモデルケースとして全国に波及させて行きたいと考えています。

本事業に対する皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

未来ビークルシティ事業のイメージ

